

タイトル 「辺野古」から辺野古へ

熊本 博之

「いやー、それはちょっと、あるな。小さいころからもうあそこで遊んでますからね。たしかに残したいね。」

これは、ある辺野古の住民が、「海を埋め立てるっていうことに関してはどう思いますか？」という私の問いかけに、間髪入れず返してくれた言葉である。だがしかし、昔から親しんできた海を埋め立てたくないと言ってくれたこの方は、実は普天間基地代替施設の受け入れを容認している。なぜ彼は、海が埋め立てられることを憂えながらも、基地を受け入れようとしているのか。普天間基地移設問題が持つ「問題性」は、まさにここにある。

## 辺野古の現状

沖縄本島は、北部、中部、南部の 3 つに分けられる。辺野古は、北部の中心都市である名護市の東側にあるのだが、この名護市東部地域は二重の意味で周辺に位置している。

まず、沖縄本島をみたとき、中南部と北部の間には明白な格差がある。人口の約 9 割は中南部に集中しており、北部は「山原 やんばる」という通称からもわかるように、自然の豊かな地域、いいかえれば、開発の進んでいない地域なのだ。中心都市である名護市でさえ、人口は 6 万人を超えない。

そのうえさらに、名護市の人口は西側に偏っている。名護市は、西側の名護町ほか 3 村と東側の久志村とが 1970 年に合併してできたのだが、旧久志村にあたる地域の人口は、名護市全体の 1 割にも満たない。

このように辺野古は、沖縄本島の周辺に位置する地域だといえよう。だがしかし、辺野古はただ周辺であり続けたわけではない。ある一時期、辺野古は多くの人たちでにぎわっていた。その発端となったのが、米軍基地の受け入れである。

## キャンプ・シュワブの受け入れ

沖縄がアメリカの占領統治下にあった 1955 年 1 月、米軍は突然、辺野古岳、久志岳一帯の山林野の接收を宣告してくる。これに対して辺野古は、接收拒否の姿勢を見せるのだが、それにかかわらず米軍は、「強制立退き行使も辞さず、一切の補償も拒否する」と強圧的に勸

告してくる。すべてを失うか、それとも基地を受け入れるか。苦渋の選択を迫られた辺野古住民がたどり着いたのは、電気や水道の敷設、地元民の基地への優先的な雇用などといった、地元には有益になるような条件を付けて、基地を受け入れるという決断であった（『辺野古誌』より）。

「生活ももうほんとにできるかできないかの生活していた。そこから立ち直る、なんとか抜け出したいといって基地を誘致したわけ。」

### **シュワブの建設と辺野古の盛況**

辺野古は、貧しい生活から抜け出すために、基地の受け入れを決断する。この結果、辺野古につくられたのが、米海兵隊基地キャンプ・シュワブである。このシュワブの建設は辺野古を一変させる。まず建設にあたって、多くの建設作業員が他の地域から辺野古に押し寄せてきた。それに応じて辺野古の住民は、作業員相手の飲食店を開業したり、自宅の空き部屋や敷地内の畜舎などを住居として貸したりすることで、現金収入を得ることができた。さらに基地の建設と平行して、米軍の協力のもと、集落の裏手にある山を切り崩して新しい集落、通称“上部落”ができた。この上部落には特飲街「辺野古社交街」がつけられ、基地の建設中は作業員が、完成後は米兵が繰り出す、一大歓楽街となる。ピークであったベトナム戦争のころは、120軒ものバーが建ち並び、そのいずれもが賑わっていた。

「こんなバケツあるな、アメリカのバケツ、大きなバケツ、そのバケツにドル紙幣ほんぽん、足でふみつけて。一晩でもうかるんだ。」

もっともこの盛況は、ベトナム戦争が終結し、多くの米兵が引き上げていくまでのこと。現在では10数件のバーが米兵や地元の住民相手に細々と営業を続けているだけである。撤去されることなく放置されているかつてのバーには、往時の面影は少しも残っていない。

### **軍用地料の発生**

また、このシュワブの受け入れは、辺野古に新たな財源を生み出した。基地に提供した土地の賃貸料、すなわち軍用地料である。シュワブには、私有地だけでなく区有地も含まれている。基地建設当時、辺野古区は、軍用地となった区有地の一部を旧来から辺野古で

生活している旧住民に分筆し、すべての旧住民に地料が入るようにした。現在では土地の権利を売り渡した住民もいるためすべての旧住民が軍用地主というわけではないが、それでも多くの旧住民は軍用地料を受け取っている。ほとんどが100万円程度であるとはいえ、毎年何もしなくても入ってくるのである。決して小さなものとはいえない。さらに、区有地に対して支払われる軍用地料もある。03年度の実績では約1億9300万円と、かなりの額である。

### **北部振興事業の実施**

辺野古におけるこのような基地と経済の歴史は、辺野古の住民に、「基地がくれば儲かる」という漠然とした意識を醸成しているといえよう。たしかに現在の辺野古社交街をみれば、そうした儲けは一時的なものではないこともわかる。海上埋立てなので、新たな軍用地料が発生するわけでもない。しかし、経済的に厳しい状況にある現在の辺野古にあっては、基地の受け入れが想起させる「儲け」の方が、説得力をもったとしても不思議ではない。そしてそれを裏付けるかのように、さまざまな振興策が、辺野古をはじめとする本島北部地域に提示され、投下されている。その最たるものが、北部振興事業である。

北部振興事業とは本島北部12市町村に10年間で総額1,000億円の財源措置を行うという巨額の振興策である。閣議決定したのは99年12月28日。辺野古沖への普天間基地移設が閣議決定した日と同日である。このことからみても、この振興策が基地受け入れとリンクしていることに疑いの余地はない。実は前日の27日に名護市が辺野古沖への受け入れを表明しているのだが、これも北部振興事業の予算計上が内定していたがゆえのことであろう。

こうした、基地受け入れの見返りに提示された北部振興事業をはじめとする振興策の数々は、名護市の財政を確実に潤すとともに、基地への依存度を高めていく。名護市の基地関係収入の決算額をみると、移設問題浮上前の96年度には16億円程度であったのが、01年度は約91億円と、5倍強にまでふくらんでいる。最新の03年度をみても、約66億円と4倍以上である。この額は、名護市の歳入総額の約4分の1を占めるまでに至っている。

### **あきらめと圧力**

このようにみていけば、冒頭で紹介した彼が、基地の受け入れを容認している理由も見

えてくるだろう。海を埋め立てたくない、基地など来てほしくない、そういう気持ちがあったとしても、これまで基地がもたらしてきた利益や、これからもたらされるであろう利益のことを考えれば、反対の声をあげることはためらわれても仕方のないことである。

しかしそれでも 97 年の名護市民投票と 98 年の名護市長選挙のころは、表立って反対の声を上げている住民もたくさんいた。その頃の辺野古では、反対派、推進派、それぞれの陣営に兄弟姉妹、肉親がいるというような厳しい状況があったという。

「婿ね、娘の婿、賛成してるんですよ。だから大変でしたよ。私たち夫婦としょっちゅうけんかでしたよ。」

こうした地域の分断は、推進派がおす市長を生み出した 98 年の市長選挙以降、反対派の住民が一人、また一人と手を下ろしていく中で、表向きはなくなっていく。しかし、地域が割れたことの爪痕は、住民の心に深く刻まれている。だからかれらは、基地の受け入れについての話を日常的には行わない。その話題になれば、忘れていたはずの傷口がまた疼き始めることがわかっているからだ。小さな集落における住民どうしの争いは、地域の持続可能性を損なってしまう。そのことは、なんとしてでも避けたいのである。

ここに重くのしかかってくるのが、普天間基地の辺野古沖への移設が、閣議決定された国策であるという事実である。辺野古でよく聞かれたのは、「国策だからしかたない」という言葉である。国がつくと決定していることなのだから、いまさら住民が反対したところで、覆されることはない・・・という「あきらめ」が、辺野古を覆っているのだ。地域の分断を恐れて、基地受け入れについては話題すらでることのない辺野古に、国策に抗うだけの力は期待し得ない。

## 反対運動の姿勢

こうした中で、辺野古では、受け入れに反対する運動が続けられている。特に那覇防衛施設局がボーリング調査に着手しはじめた 04 年 4 月 19 日以降は、座り込みが 1 日も休むことなく続いている。だがしかし、そこに辺野古の住民の姿はそれほど見られない。たしかに運動の中心にいるのは、住民運動組織である「命を守る会」のメンバーである。ただ、その数は、辺野古への基地建設を阻止するために全国各地から集まってきた人たちとくらべれば、圧倒的に少ないと言わざるを得ない。

この、辺野古の外から運動に参加している人たちのほとんどは、反戦平和の立場から辺野古への基地移設に反対しており、運動の現場でも反戦平和を主張する。その主張には、これまで述べてきたような辺野古住民の抱える複雑な事情への配慮は、あまりみられない。

もっとも、これは仕方のないことではある。辺野古沖への移設という国策を覆すだけの力を生み出し、維持していくためには、多くの人たちによる継続的な支持・支援が不可欠である。そしてそのためには、個別具体的な課題の解決ではなく、より遠くにある、普遍的な価値の実現 普天間基地移設問題の場合は、戦争のない、平和な社会の実現 を目標とすることで、支持の裾野を広げなければならない。しかし目標が遠くに置かれれば置かれるほど、目標は抽象的になってしまい、どうしても地域の個別具体的な問題からは離れていってしまうのである。

## 住民と運動の距離

このように考えていけば、反対運動が辺野古の住民から乖離していってしまうのは、必然的な結果だということがわかる。軍事基地をめぐる問題が抱える宿命といってもいいかもしれない。反戦平和運動にとって、住民の複雑な気持ちは、理解することはできたとしても、それを汲み取った運動を展開することは難しいのである。容認派の住民は、そこをめざとく指摘する。

「よその人たちは辺野古のひとたちにまったくそういう期待もあげることなく、自分たちがいっしょうけんめい目指していることに行動的にでる、という気構え。なかなか、あのひとたちと話し合いたいという気持ちにはならないね。」

とはいえ、「われわれだけの力ではですね、おそらくこんなね、盛り上がりっていうのは絶対につくれない」と感謝している住民もいるように、一概に批判的な意見ばかりが浴びせかけられているというわけではない。また、容認の立場にある住民も、運動を批判しつつも、座り込み行動を阻止しようとはしてはいない。できることなら基地には来てほしくない、海も埋め立てたくない、という気持ちが、彼らの根底にはあるからだ。だからこそ、反対の声をあげられない自分たちのかわりに反対の意思を示してくれている座り込み運動を、全面的に否定することもないのである。

このように、辺野古の住民の多くは、複雑な状況のなかで運動との距離をはかっている。

いっしょに活動している人もいれば、批判的な言葉を浴びせかける人もいる。そして辺野古の人たちはみな、反対運動の存在を必要としており、それと同時に、運動をおこさなくてもよい、移設問題が起こる前の辺野古にもどってほしいと思っているのである。

「がんばってほしいと僕はあの、いいたくはないですね。ごくろうさんと。がんばってほしいということは、まだこうあの、座り込んでほしいという意味合いがあるわけですからね、ごくろうさんと、ごくろうさんということはもう、もうもうもう、なくなってほしいということです。」

### 「辺野古」から辺野古へ

辺野古のことを考えるとき、いつも脳裏に浮かんでくる言葉がある。やや長いが、省略せずに引用する。

「生まれ育った環境を残したいという思いもありますね。子どもたちに遊び場を。山もいけど海もいいんですよ。それを、その環境をですね、子どもたちにも将来、自分たちが育ってきた環境を残してあげたいという気持ちは、これはもうあの、あります、これはありますよ。その中で、活性化ということをいっている人たちもたくさんいます。そういうことを、基地が来ると仕事that来るといっている人もたしかにいます。でも、それはもう、よしあしですよ。こっちがいつてもあつても、あっちがいつてもあつても。でも自分の立場としてはほんともう、ふがないというか曖昧けどアバウトです。中立ですから、中立ですから個人としては、これもうあの、仕事上におきかえても、そう、そうせざるを得ないと。」

海を残したい、基地にきてほしくないという人たちの気持ちもわかる。基地がくれば仕事きて、地域が活性化するという人たちの気持ちもわかる。どちらも、辺野古という地域でこれからも生活していくために出てきた意見だから。だから個人としては中立にたつしかない・・・

辺野古は、このような状況に置かれている。建設されれば、その最大の被害者となる辺野古の住民には、受け入れの是非を判断する力も、決定する権利も、残されてはいない。そのことが、この問題における最大の問題点なのである。背景には、地域の歴史的経験や、

経済構造、現在の経済状況など、複雑な要因がある。それらを踏まえた上で、1つ1つ、問題を解決していくことが求められている。

しかし、反対運動の現場やその周辺で語られる辺野古は、「 」つきの辺野古、「辺野古」である。そこでは辺野古は、日米両政府による暴挙の犠牲者であると同時に、その暴挙を押しとどめるための最後の砦であり、そして沖縄の、ひいては世界の平和を実現するために守らなければならない一里塚である。

このような抽象化された「辺野古」からは、そこで具体的な生活を営んでいる住民の姿が抜け落ちてしまっている。たしかに、そうならざるを得ない理由はある。けれども、このまま、「 」のとれた日常の辺野古から、目をそらし続けていいのだろうか。このままでは「運動のための運動」になってしまわないだろうか。

もちろん、辺野古の海を埋め立てて基地をつくることは、なんとしても阻止しなければならない。そのような事態を望んでいる人は、辺野古には一人もいない。しかし、もしこのままの状態に移設の中止が決定されたとしたら、辺野古は、「いらぬものはいらぬ」と主張する権利を、意思決定権を剥奪されたまま、放り出されてしまうだけである。そこに、今度は原子力発電所を建設するという計画が立ち上がったとき、同じことにならないという保証はどこにもない。

辺野古に意思決定権を取り返す。これこそが、遠回りかもしれないが、もっとも重要な課題である。そのためには、まず運動が、「 」のない辺野古を知る必要がある。住民の複雑な事情を理解し、その要因を1つ1つ取り除いていく必要がある。この論稿が、そのための一助とならんことを祈念しつつ、筆をおく。